第一高等學校教授
小中村義象講述

國文解釋

版權所有

大日本中學會

國文摘解目錄

總論　一丁

(一)記事文

(イ)四季の景色（徒然草）　八丁

(ロ)安元の大火（方丈記）　八丁

(ハ)源爲朝（保元物語）　一九丁

(ニ)太田道灌の事（常山紀談）　二三丁

(ホ)結城秀康關東にとゞまる（藩翰譜）　二八丁

(ヘ)加賀千代女の事（續近世畸人傳）　三〇丁

(二)紀行文　四四丁

(イ)水分神社（菅笠日記）　四四丁

(ロ)菊川（中空の日記）　五一丁
(ハ)淺草隅田川（回國雜記）　五四丁
(ニ)吉野の花見（吉野巡）　六一丁
(ホ)江戸の花見（一話一言）　六七丁

國文摘解目錄 終

國文摘解

小中村義象講述

總論

人の思想を寫すものを言語といひ、言語を寫すものを文章といふ。言語は、彼我相對する間に欠くべからざるものにして、現在の用をなし、文章は、遠人に傳へ、天下萬世に遺して、自らの意を示すものにして、現在及び將來の用をなすものなり。

凡そ人たるものは、いかに、卓識英才の士たりとも、いかに聖明の御代とても、時に遭はずして、空く埋もれはつるものあり。たまゝ〳〵庸ゐられても、その才を、伸ばすこと能はざる事情あり。かゝる時に當りて、滿腔の精神を、一篇の文章に注き、之を天下に質し、萬世の知己を待つやうの事は、尤必要に、尤愉快の事にして、士たるものゝ、用意す

べきことならずや。

右のごとき境に陥りたる人は、その生きてあらん間こそ、草木土偶などと、同じやうにも、俗人などはいはめ、その論傳はり、その説擴がりて、百世の下、天下を左右するやうに至るも知るべからず。大丈夫たるもの豈生きて俗世の宰相たるをのみ願ひとせんや。文章の必要、こゝに於て愈多し。

鬼神を泣かしむとは、專ら歌の上にいふことなれど、文に於ても猶然り。試に古今内外の人の、精神ある文を味ひ見よ。必、予が言の誣ひざるを知らん。されば文をかくは、たゞに、我が説を人に傳ふるのみならず、能く人を活かし、人を殺す力あるものなり。文章の必要、こゝに於て愈貴し。

かくのごとく、人生に、尤必要ある文章は、いかにして、習ひ得るか、いかにせば、我精神を、人に傳ふるやうに、書き得るか、といふに、左の諸條に依らざるべからざるなり。

(一)精神を鍛練し氣象を盛んにする事

(二)國語の法則を知る事

(三)觀察力を養ふ事

(四)判斷力を養ふ事

(五)多く書を讀む事

(一)文は氣象を尚ぶ。氣象は、精神の鍛練より養はる。人として、精神なきものはあらず、氣象なきものはあらざるべけれど、その乏しきものは、殆と無きものとしも見做さるゝに至るものなり。かゝる人の文は、たとひその詞、美麗なるも、その法則確かなるも、決して人を感動せしむる力なきもの也。之に反して、聊か修辭の疎雜なるも、精神溢れ、氣象充々たる文は、讀むまゝに、齒もくひしばられ、腕もさすられ、憂を忘れ、食を忘るゝにも至るものなり。古人が、出師表を讀みて、泣かざるものは、人にあらずといひしも、その精神氣象の充滿したればなり。今世文人、多くは、柔弱にして、從てその文惰弱なり。大に注意せざるべからず。

(二)日本人は、日本の言語を有す。その文もまた日本文たらざるべからざるは、當然の理なり。歌文を學び、漢文を習ふは、我が文思を養はんためなり。文語のよきを取らんためなり。たとへば、體を壯健ならしめんために、肉食するが如し。肉食して、體を損ひ、人の文を學びて、我が文を傷くるやうの事あらば、初より學ばざるにしかざらん。軍艦、大砲は、我國を護り、我武を張るためなり。我國を破り、我武を汚すものたらざることは、誰も知りたることならむ。文を學ぶに、我を主にして、外國を客にするはこの覺悟ならざるべからず。されば、まづ國語の法則を研究するもの必要なるは、戰ひに臨みて、先づ地理を研究するがごとし。前に大河あるをも知らず、後に高山あるをも悟らずして、戰はんには、必、全軍敗をとるべきは自然の勢ならん。能く地理をあきらめてこそ、初めて縱横自在に、大軍を率ゐることも爲し得べけれ。文法の文章かく上に大切なる、能々たもふべきなり。

(三)文をかゝんには、觀察力を養はざるべからず。一つの草木をとり、一つの器具に逢

ひても、深く心をとめて、觀察したくべし。これ、れのが文をかく時にあたりて、大なる材料となるものなり。たとへば、松といふ題にて、文をかゝんには、乘て松といふ木の、いかなる性質を有し居るか、いかなる、用を爲すものか、いかなる處に、尤多く生するか、いかなる人が、尤多く愛するか、いかなる歷史を有するか、いかなる文人が、いかなる思想をおもひよせしか等、さまゞゝに考ふる時は、やがて一の文を爲すに至るべし。これ、常に觀察したかざれば能はず。かくのごとく、社會のあらゆる問題に付て、精細に觀察しれくときは、文を作るに當りて、さほど困難にもおぼえず、すらゝゝと成り安きものなり。常に茫然と、日月を過して、その場に臨みて、思ひをめくらすがごときは、盜を捕へて、繩を索ふ類にして、よき文は出來ざるものなり。

(四)觀察のみ、行屆きたりとて、判斷する力なくば、何の甲斐もなきことゝならん。かゝる人は、一篇の字書のごとく、たゞその事、その物を列擧したるのみにて、人を感せしむること能はざるのみか、讀む人をさへ倦ましむるに至らん。たとへば、義經といふ題に

て、文をかゝんに、徒らにその人の爲したることその容貌舉動等、並べ舉げたるのみにては、れもしろくも、れかしくもなきものなり。その材料を、おのが心によく見分け、判斷して、よき工合に並べ舉げて、それより得たる考案など、れもしろくかきつづりてこそ、初めて、人を感動することもし得べけれ。但しかくいへばとて、早合點に、彼是論議し、事實の掩ふべからざるものあるも、おのが論にさしつかふる時は、措て問はざるがごときき弊あるは、甚だ忌むべき事也。要するに親察力と、判斷力とは、相待ちて進まざるべからざる也。

(五)文學は一朝に發達したるものにあらず。是に於て、古書を讀む必要あり。言語は時々變遷して、よき時と、わろき時とあり。是に於て、古書を讀む必要あり。又言語には、雅なるあり、俗なるあり。外來あり。これ古書によらざればわからず。必竟は、古文を讀みて、そのよき思想をとり、そのよき語句を取り、おのれが文との衝突を避け、(例へば、「袖ひちて結びし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん」といふ古歌あるを知らずして、おのれこの通りによみ出さんとも限るべからず。然れども、已に古人がよみれきたるならば、人は偷みてよみたりとおもふらん、これ大に我身の損なり。かゝることゝ、文にも、甚多からん。常に古書をよみて、衝突を避るは、後生の人の義務なり。古人の文のわろきを見、足らざるを見て、みづから戒めとする等にあるなり。ことに、國文のごときは、古來未だ深く研穿したるもの少し。吾人は、能くその田園を耕して、一大美花を發せしめんことを期せざるべからざるなり。また精神あり、氣象あり、國語の法則に明に、觀察力に富み、判斷の力あるとも、多く古文をよみ說く力なきときは文を作る上に臨みては、甚窮するものなり。

そも〳〵時こそ異なれ、人こそ違へ、文の體は、論說、紀行、祝祭文などいふやうに、大かた、その極まりあるものなり。是ら、大抵、古人が經驗したるものなれば、吾人は、その體を心えて、さて後時に臨みて、變化自在にかゝんことはいかにもあるべし。故に、予は是より、國文のかず〳〵を並べ舉げて、之を畧註批評して、今より文をかゝん人の參

考とせんとす。こゝに、國文摘解を草するに當て、聊か作文について、れもへることのよしを、述べにくになん。

(一)記事文

(イ)四季の景色

(徒然草)

折節(タリフシ)の移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ。

此レ此段ノ冒頭ニシテ、後ニ四季ノ景色ヲ、イロ〳〵ニカ、ンタメナリ。折節トハ、時候ト云フニ同ジ。物ごとにハ、萬事ニツケテナリ。あはれトハ、心ニ面白クモ、悲シクモ、喜バシクモ、感ズル時、發スル語ナリ。アヽト云フト同ジ。コヽハ、面白ク感ゼラルヽト云フ義ナリ。

物のあはれは、秋こそまされと。人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは、心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。

コレヨリ、愈本文ニ入リテ、春ノ景色ヲ叙セントス。物のあはれ、コヽニテハ、物事

ニ付テ、面白ク感慨深クナル意ニイヘリ。いふめれトハ、人々ガ云フヤウダケレドモトノ意。それもさるものにて云々ハ、其事モ、サヤウダケレドモ、今一層心モ浮キ立テ、面白キハ、春ノ景色ナリトナリ。あめれ、カヽル所ハ、イツモあンめれト訓ム例ナリ。コヽハ、アルナレト云フコトノ約(ツヾマ)リタルナリ。

鳥の聲なども、殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根(カキヲ)の草もえ出るころより、やや春ふかく、霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、折しも、雨風打つゞきて、心あはたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、萬(ヨロヅ)にたゞ心をのみぞなやます。

コレヨリ、春ノ景色ヲ、一層細カニ叙セリ。春めきてハ、春ノヤウスシテト云フホドノ義。コノめきト云フ詞ハ。メカン、メキ、メク、メケト活ク詞ニテ、體言ノ下ニツキテ、形容ノ意ヲ顯ハスモノナリ。有仲集ニ「百千鳥(モヽチドリ)朝けの空に遊ぶなり殊の外にも春めきにけり」ト云フ歌アリ。のどやかなるハ長閑ナル義、やかもめきト同ジ意味ノ詞

垣根の草もえ出るころ、垣ノ本ノ草ナドノ青々ト生ズルコトニテ、初春ノサマ也。垣根トハ、垣ト云フコト、垣ノ根ニハアラズ。もえ出つトハ、芽ヲ含ミテ、出ルサマヲイフ。春ふかく、春ノ景色ノ進ミ行クヲ云フ。霞みわたりて、わたりトハ霞ノ一體ニ、立渡ルコト。花もやう〳〵けしきだつ。櫻ノ花咲カントスル景色ノ見ユルヲ云フ。だつモ、めく、やか、ナド、同ジ意ノ詞。程こそあれ。ソノ時、丁度ト云フヤウナルコト。雨風打つゞき云々、今花サカント待居ルホドニ、生憎ニ雨風打ツ、キテ、急ニ苦ナガラニ散リ過ルコトノ惜シキヲイフ。心をのみぞなやますトハ、花ノサケカシト待チテ、ヤウ〳〵サキタト思ヘバ、雨風ニ散サレナドシテ、花ノ爲ニ常ニ心ヲ惱マスコトノ多キヲイフ。コレ風流ノ心ニハ面白キ意ニカケルナリ。業平の「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」ナド謠ヘルモ思ヒ合ハスベシ。花橘に、名にこそおつれ。猶梅の匂ひにぞ、いにしへのことも、立かへり、戀しうおもひいでらるゝ。山吹の清げに、藤のたぼつかなきさましたる、すべて、思ひすてがたきこと多し。

此ヨリ、晩春ノ狀ヲイヘリ。花橘は名にこそおつれトハ、橘ハ彼ノ田道間守ノ事ヨリシテ、其花ノ香ヲカグバ、古シヘナツカシウ思フ事ニ、イヒナセリ。業平ノ「五月まつ花たちばなの香をかけば、昔の人の袖のかぞする」ナド云フ歌ヲハジメテ、數多アリ。古ヲ忍ブモノトシテハ、橘ガ第一ニソノ名ヲ貪ヒテヲレドモトナリ。猶梅のにほひ云々ヤハリ梅ノ匂ヒニゾ、昔ノ事ハ慕ハル、トナリ、業平ノ「月やあらぬ」ノ歌、家隆ノ「梅が香に昔をとへば春の月、こたへぬかげぞ袖にうつれる」ナドアマタ清げハ清ラカナルコト。藤のたぼつかなきトハ、花ノ風ニ吹カレナドシテ、垂レ下レルサマナリ。藤ハ五色ノ外ノ色ナレバ、イフナドイヘルハ、アマリニ穿チタル說ノヤウナリ。さましたる、アリサマシテアルナリ。すべてもひすてがたきこと多し。初春ヨリ晩春マデ、色々ノ草木百鳥、又ハ空ノサマナド、見捨テガタキコトノミ多シトイヒテ、春ノ景色ヲホメタルナリ。

灌佛のころ、祭りのころ、若葉の梢すゞしげに茂り行くほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ實にさるものなれ。五月あやめふくころ、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。

此ヨリ夏ノ景色ヲイフ。灌佛トハ四月八日、釋迦ノ誕生日ナレバ、佛ニ水ヲ灌グ儀式アリ。祭トハ、四月中ノ酉日ノ賀茂ノ御形ノ祭リヲイフ。灌佛、祭ナド當時普ク唱ヘタル詞ノマヽニカケルナリ。即、四月上旬ヨリ、中旬位マデノ時節ナリ。若葉の梢、花散リテ瑞枝涼シサウニ生ユル頃ナリ。世のあはれ、人の戀しさ、凡テ物淋シクナル故ニカヽル心モ増スモノナリ。躬恒ノ歌ニ「我宿の花見がてらに來る人は散りなん後ぞ戀しかるべき」トイフアリ。後鳥羽院の御製に「花はちりぬいかにいひてか人またん月だにもらぬ庭の梢に」ナドモ見ユ。實にいかにもト云フホドノコナリ。あやめふく、五月五日ハ、瑞午節トテ古ハ儀式アリテ、軒ゴトニ菖蒲ヲ葺キ、邪氣ヲ拂フタメニセリ。コハ禁裏ヲ初メ奉リテ、一般ニ爲セシコトナリ。早苗とる百姓カ稲ノ苗ヲ

植ルコ。コレラハイヅレモ五月上旬中旬位ノコトナリ。月日ヲイハズシテ、ソノ時ニ行フベキ事ヲモテ書キツヾケタルハ、文章トシテ尤優ニキコユルモノナリ。水鶏のたゝく、水鶏ノ鳴ク聲ハ、戸ヲ叩クヤウナレバイフナリ。心ぼそからぬかは、心細クアラヌカハ、心細シト、深ク强メテカケリ。コレアハレニ面白キ意ナリ。

六月のころ、あやしき家に、夕貌の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。六月祓またをかし。

あやしきハ賤シキトイフコト。ふすぶる、蚊遣火の烟ノ立ツサマナリ。俗ニスブラカスナド云フ意。コレ賤民ノアハレナル夕ノケシキヲカケルナリ。六月祓コハ上代ヨリノ風俗ニテ、六月ノ晦ト、十二月ノ晦トニハ、朝廷ヲ初メ奉リテ、一般ノ人ニモ、冥々ノ裏ニ、犯シタル罪穢レヤアラントテ、祓ヒ清ムル式アリ。コハ河原ニ出デヽスルコトニテ、ソノ儀トモノ、タヾナラヌヲ、マタ面白シトイヘルナリ。

七夕まつるこそ、なまめかしけれ、やう〳〵夜さむになるほど、雁鳴て來るころ、萩の下

葉、色つくほど、わさ田苅りほすなど、取あつめたることは、秋のみぞ多かる。又野分の朝こそ、をかしけれ。いひつゞくれば、皆源氏物語、枕草紙などに、ことふりにたれど、同じこと、又今更にいはじとにもあらず。ねばしさを、いはぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなき、すさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

コレヨリ秋ノ景ナリ。七夕祭、古クハ普ク行ハレタリ。カヤウナル儀式ノ事ハ公事根元ト云フ書ニ委シ、付テ見ルベシ。なまめかしトハ優美ニヤサシキ意。コノ祭ニハ、歌ナドヲ手向ナドシテ、惣テ事ガラノ優ナレバ云ヘルナリ。夜さむになる夜ノ寒クナル程。雁鳴て來る比、雁ハ春飯リテ秋來ルモノナリ。萩の下葉色づく萩ノ下葉ノ黄色ニナリテ、散リカヽルコト。わさ田早田ヲ苅リテ、ソノ稻ヲ干スナリ。カヤウニ列ヲ擧ゲタルハ、孰レモ取集めたる事は秋のみぞ多かるト云フヲイハンタメナリ。取集めたることトハサマ〳〵ノ景色、イロ〳〵ノ哀レヲ取集メタルナリ。多かるは

多クアルナリ。野分トハ秋吹ク暴風ナリ。野ノ草木ヲ吹分クルヨリ、名ヅケタリ。をかしハ面白シナリ。いひつゞくれば云々カヤウニ色々ト、景色ナド言ヒ續クレバ、古人ノ書キタル、源氏物語、枕草紙ナドニアルト、同ジヤウニナリテ、古ルメカシクナレルニ似タレドモ、同ジ事ヲ今更ニ言フコトノナラヌト云フ理モナケレバ、思フマヽニイフトナリ。ねばしさこと云々心ニ思ヒアルコトヲイハヂハ、腹フクレテ、苦シキ事ナレバ、筆ニマカセテカクトナリ。あぢきなきすさびトハ、興味モナキナグサミナリ。かいやり書キ破リ捨ツベキモノナリ。かきヲかいトイフハ音便ナリ。

さて、冬かれの景色こそ、秋には、をさ〳〵れとるまじけれ。汀の草に、紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うふける朝遣水より烟のたつこそをかしけれ。

コレヨリ、冬ノ景ナリ。冬がれトハ、冬ニナリテ、草木ノ枯果テタル景色ナリ。れさ〳〵トハ、アンマリト云フ意。汀の草云々コレ劣ラザル由ノ景色ナリ。遣水より烟のたつ筧ノ水、又ハ庭ノ泉水ナドノ流レヨリ、冬ノ朝、水烟ノ立ツケシキナリ。

年の暮れはてゝ、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなるすさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる、廿日あまりの空こそ心ぼそきものなれ。

いそぎあへる急ぎ合フニテ、歳暮ノイソガハシキサマ也。又なく又コノ上モナクナリ。すさまじきハ物凄キナリ。コレ兼好遁世ノ心ヨリ、歳暮ニ忙ハシキ人ノ上ヲ評シタルナリ。廿日あまりの空十二月ノ空ナリ。

御佛名(オンブツミヤウ)、荷前(ノサキ)の使立(ツカヒ)つなぎぞ、あはれにやんごとなき。公事(クジ)ども繁く、春のいそぎに、とりかねて、催はしれこなはるゝさまぞいみじきや。

御佛名トハ十二月十九、廿、廿一日ト、三日間、朝廷ニテ佛ノ名號ヲ唱ヘラル、儀式アリ。荷前の使諸國貢調ノ物ヲ、諸山陵ニ奉ラル、使ナリ。コレラモ、公事根元ニ詳ナリ。やんごとなき貴キコトナリ。公事物ヲ朝廷ノ御儀式ヲイフ。春のいそぎ春ノ支度ナリ。歳暮ハ、公事トモ繁カルニ、春ノ支度サヘ、取重ネテ、催サル、サマゾ、メデタク貴キトナリ。いみじきトハ、甚シキト云フフニテ、モトいみじくれもしろきトカ、

いみじく貴きトカイフベキナレドモ、省キテカク書ルナリ。やハよト云フニ同じ、追儺(ツイナ)より四方拜につゞくこそ、れもしろけれ。晦(ツモリ)の夜、いたうくらきに、松ども、ともして、夜半すぐるまで、人の門たゝき、はしきありきて、何事にかあらん、ことゝしくのゝしりて、足をそらにまどふが、曉がたよりさすがに、音(オト)なくなりぬるこそ、年のなおりも心ぼそけれ。

追儺ハ鬼やらひナリ。十二月晦ノ夜行ハル。四方拜ハ、正月元旦寅ノ時ニ、天皇ノミヅカラ行ハセタマフ大禮ナリ。晦の夜云々コレヨリ立カヘリテ、又除夜ノサマヲイフナリ。いたふハ太クノ音便。甚ナリ。松ども、ともしてハ松明(タイマツ)トモシテ歩クサマナリ。ことゝしく、仰山ニナリ。いひのゝしり言ヒ騒グナリ。足をそらに足ヲ空ニシテ、走リ歩クトナリ。さすがにサウハサウナガラト云フコト、カヤウニ忙ハシキ夜ナレド、曉方ニナレハ、サウハイフモノ、靜ニナリヌトナリ。

亡(ナ)き人の來る夜とて、靈(タマ)まつるわざは、このおろ都にはなきを、東(アヅマ)のかたには、猶すること

とにて、ありしこそ、あはれなりしか。

亡人ノ靈ヲ年暮ニ祭ルコトハ、古キ風習ナリケルガ、兼好時代ニハ、都ノ方ニハ絶エテ、東方ニノミ殘レリ。ソレスルガ、アハレナリトナリ。ありしこそハしかニテ結ブナリ。しがト濁リテ訓ムベカラズ。

かくて、明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見ねど、引かへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松立わたして、はなやかに、うれしげなることそ又あはれなれ。

かくてハ此シテナリ。明けゆく空トハ翌年元日。昨日トハ舊年の大晦ナリ。引かへ昨日ニ引カヘテナリ。大路のさま云々トハ即メヅラシキサマヲイヘルナリ。松ハ門松ナリ。はなやかにうれしげトハ年頭ノ景色人々ノヤウスナリ。あはれハ例ノ面白キ意。

(總評)冒頭ニ、時候ノ變遷スルコトノ面白ク感ゼラルヽコトヲイヒテ、春夏秋冬ト、次々ニソノ景色ヲ叙セル、文優ニ、氣高シ。又常ニアハレト云フ語ヲ、一篇ノ主旨トシテ、貫キタル、少シモ緩ミタルアト見エズ、文ニ思想ヲ要シ、氣慨ヲ要シ、又修辭ノ注意スベキコト等、能々味ヒ見テ知ルベシ。

(ロ)安元の大火　(方丈記)

去る安元三年、四月廿八日かとよ、風はげしく吹きて、しづかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより、火出來りて、いぬゐにいたる。はてには、朱雀門、太極殿、大學寮、民部省まで、うつりて、一夜が程に、灰となりにき。火本は、樋口富小路とかや。病人をやどせる假屋より出來けるとなむ。

コヽニ、先ヅ火事ノ概畧ヲ書ケルハ、跡ニテ委シク書ン用意ナリ。安元三年、高倉天皇ノ朝ナリ。コノ年治承ト改元セラル。風はげしく吹きて云々、コレ火事ノ擴カリシ故ナリ。戌の時、五ツ時ニシテ、午後八時ナリ。ばかり、ホド、云フニ同シ。都の辰巳云々、京都の東南ノ間ナリ。コノ方ノ風ハ、強キ例ナルニ、火ヲ吹キ立テツレバ、イカニモ恐シキ事ナリシナラン。戌亥、西北ノ間ナリ。はては終リニハナリ。朱雀

門、宮城ノ正門ナリ。南面ニシテ、京城ノ中央ニアリ。太極殿、宮城ノ正殿ナリ。朝堂院トモ、八省院トモ云フ。朝廷ノ大禮ヲ行ヒタマフ最大殿ナリ。大學寮、京都第一ノ學校ナリ。今ノ帝國大學ノ如シ。民部省、戸籍、田租、調庸等ノ事ヲ掌ル役所ニシテ、今ノ大藏ト內務トヲ合セタルガ如キ省ナリ。是等皆京都中屈指ノ建物ナリ。

一夜ノ程ニ云々、カヤウナル堅牢ナリシ建物モ、一夜ノ間ニ灰燼ニ皈シタリトナリ。

樋口富小路、即チ都ノ辰巳ナリ。病人をやどせる云々、失火ノ原ハ、過失ナリシ一、コノ文ニテ悟ラル。なむノ下ニ聞くトカ云フトカノ意ヲ含メテ書ケルモノナリ。

吹まよふ風に、とかくうつり行くほどに、扇をひろげたるごとく、末ひろになりぬ。遠き家は、煙にむせび、近きあたりは、一向、炎を地にふきつけたり。

吹まよふ風、辰巳ノ風ノ愈々吹荒ルトサマナリ。とかくうつりゆくほどに、コヽニモ、カシコニモ、火ノ移リユクナリ。扇をひろげたる云々、火勢見ルガ如シ。遠き家云々、遠近ノ家ドモノ炎又ハ烟ニ吹巻カルヽサマ、只目ノマヘニ見ルヤウナリ。コレ

火事ノサマヲイフ第二段。

空には、灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず吹きゝられたる炎、飛ぶがごとくにして、三町を越えつゝうつりゆく。その中の人うつゝ心ならんや。

風にたへず云々、風ノ勵シキマヽニ、炎ノ吹キ切ラレテ飛ブサマナリ。イハユル飛火ナリ。うつゝ心、現心ニテヤハヤハノ意反語ニテ生キテ居ル心セザルヲイフ。コレ火事ノサマヲイフ第三段。

あるひは、烟にむせびて斃れ伏し、或は炎にまくれて、たちまちに死ぬ、或はまた僅に身一つ、からくして遁れたれども、資財をとり出るにおよばず。七珍萬寶、さながら灰燼となりにき。その費へ、いくうばくぞ。

コレ現心ナキ人々ノ難ニ遇ヘルサマヲイヘルナリ。むせびて、ムセルコトナリ。まくれて、炎ニ混ジルコトナリ。からくして、辛クシテ、ヤットノ事ニテト云フガ如シ。

七、珍萬寶、無數ノ珍器寶物ト云フホドノ事。さながら、ツノ儘ニナリ。コレ火事ノサマヲイフ第四段。

この度、公卿の家十六燒けたり。その外は數しらず。すべて、都の中三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人。馬牛の類ひ、邊際を知らず。人の營み、れろかなる中に、さしも危き、京中の家を作るとて、寶を費やし、心を惱ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

公卿、三位以上の貴人タチノコト也。邊際を知らず、數限リヲ知ラズトイフコトナリ。コレ前數段ニ記シ來レル火事ニヨリテ、難ヲ蒙ムリシ概畧ノ統計ニテ、前文ヲ結ベルナリ、人の營み云々、コレヨリハ、記者ノコノ事ニ付テ、兼テ懷ケル主意ヲ述ベタルナリ。營ミトハ人トシテノ仕事トイハンガゴトシ。れろかなる、トハ即記者ガ俗世ヲ輕ヲタルヨリカケル文ナリ。さしも云々、總テ人生ノ中ニ汲々スルハ、愚ナル事ニモ、然モ危キ京中ノ家ヲ作ランタメニ、サマ〳〵心ヲ勞シ財ヲ費スハ、極メテワ

ケノ分ラヌ甘味ノナイ、ツマラヌコトナラントイフナリ。コヽ脫俗ヲ勸メン下心ニテカケレバナリ。

(總評)此文、タヾ火事ノサマヲ記セル中ニ、自ラ風ト炎ト烟トガ、脈絡トナリテ、一篇ヲ貫キ、コレニ依リテ苦シメラル、人々ノサマヲ叙セル恰モ己レソノ場ニアルガ如シ。カクテ、末文、人の營み云々トイヒテ、記者ノ本心ヲ顯ハシ、讀ム人ノ恐シカリシ感情ヲ轉ジテ、俗世ヲ脫セシメントス。軍將ノ劒ヲ脅シテ人ヲ虜ニスルノ畧アリ。

(八)源爲朝　(保元物語)

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目の角二つきれたるが、紺地に、色々の絲を以て、獅子丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同獅子の金物打たるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊ノ皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、つく打たるに、三十六さしたる、黑羽の矢負ひ、兜をば、郎等に持せて歩み出たる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。

此文ハ保元ノ亂ニ、新院崇德上皇ノ御所ヲ護ラン爲ニ、爲朝ノ鎭西ヨリ參リテ、軍評定スル時ノ狀ヲ記セルナリ。

爲朝は云々。先ヅ爲朝ノ容貌ノ尋常ナラヌヲカケリ。七尺ト云フモ隨分大ノ男ナルニ目ノ角サヘ二ツニ切レタリト云フ、ソノ勇マシキサマヲ思ヒヤルベシ。紺地ニ云々直垂、即、軍服ノサマナリ。獅子ノ丸ヲ縫ヒタルハ、イカニモ勇者ノ服ナルベシ。八龍といふ鎧、コハ源家重代ノ鎧ナリ。ソレニ似セテ作レリトナリ。白き唐綾云々。大荒目トハ、普通ノ鎧ノヤウニ細カニオドサズシテ、大キク粗クオドシタルモノナリ。獅子の金物。コハソノ鎧ニ金ニテ打タルナリ。古代ノ武者畫ニ往々見ユ。熊ノ皮の尻鞘入。太刀ノ鞘ノ上ヨリ更ニ、熊ノ皮ニテ縫ヒタル袋ニ入レタルモノニテ、俗ニ帯木鞘ナドイヘリ。五人張云々。五人ニテ張リ得ベキホドノ弓ナリ。つく打たる。つくトハ鈎ノ字ニテ、弓ニ矢ヲツガフ時、矢ノ當ル所ニ、折釘ヲ打チ、ソレニカケテ射レバ、矢ノコボレスヤウニスルコトアリ。ソノ折釘ノ事ヲつくト云フ。コハ多ク丸木

ノ弓ニスルコトニテ、戰場ニハ尤便ナリト云フ。黑羽の矢負。黑キ羽ノ矢ヲ箙ニサシテ背ニ負ヘルナリ。郎等。從者ノ事。當時ノ詞。樊噲も云々。猛勇ナル樊噲ガ姿モ思ヒ出サル、ト云ヒテ、爲朝ノ勇マシキヲイフ。

謀は張良にも劣らず。されば、堅陣を破ると、吳子孫子が難しとする處を得、弓は養由をも恥ちされば天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふとなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、こぞりたまふ。

上段爲朝武勇ノサマヲ叙シ、コノ段、ソノ智謀ノホドヲ云フ。張良ハ有名ナル智謀家。吳子孫子モ名高キ兵法家。養由ノ弓ニ於ルモマタ同ジ。天を翔る鳥云々。爲朝ノ尤弓術ヲ能クセシヲ云フ詞。コレ全篇ノ主眼。上皇をはじめ云々。カヽル珍ラシキ人ユヱ、上皇ヲ始メ奉リテ、有合フ人々皆集リ擧リテ騷ギ見ントスルサマナリ。此ノ爲朝ィカナル事ヲカ云ヒ出スト、讀者ヲシテ、先ヅ想像ヲ起サシム實ニ妙文ナリ。

左府、即ち合戰の趣、計ひ申せと宣ひければ畏つて、爲朝久しく鎭西に居住仕りて、九國

の者とも、從へ候に付て、大小の合戰、數を知らず。中にも折角の合戰二十餘ヶ度なり。或は敵に圍まれ強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得ること、夜討に若くこと侍らず。然れば、只今高松殿に押しよせ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れんものは、矢を免るべからず、矢を恐れんものは、火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但兄にて候義朝などこそ懸出すらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。

左府。左大臣藤原頼長ナリ。畏つてコレヨリ爲朝合戰ノ意見ヲ述ルナリ。コノ人、素ヨリ兵學トテ爲シタルモノニモアラザルヘケレバ、オノガ經驗ニヨリテ、思フマヽニ述ベテ夜討ノ利ヲ云フナリ。高松殿、即、主上ノ御方ナリ。三方ヨリ火ヲ放チ一方ニテ戰ハント云フ、カク火ト矢トニテ攻メ落サント云フハ、イヅコマデモ、自分ノ得意ノ策ヲ述ルナリ。心にくゝも候はず。奥床シク思ヒヤルホドノ人モナシ、但シ兄ナル義朝ナドヤ、カク出ツラン、ソレモ甲ノ眞中サシテ射通シ候ハヾ何ホドノ事モ候

ハシトヤスグニ述ルナリ。

まして清盛などが、へろ〳〵矢、何ほどの事か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴ちらして捨てなむ、行幸他所へならば、御免されを蒙りて、御供のもの、少々射んするほどならば、定めて駕輿丁(カヨウチヨウ)も、御輿をすてゝ逃け去り候はんずらむ。その時、爲朝參り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即けまゐらせんこと、掌を返すことくに候べし。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんとするばかりにて、未だ天の明けざらん前に、勝負を決せん條、何の疑か候べき。云々

まして清盛云々。コレ上文ヲ受テイヘルナリ。義朝ナドモ何ホドノ事モ候ハジ、況ヤ清盛ナドガ射ルヘロヘロ矢、タヾ鎧ノ袖ニテ拂ヒ蹴散ラシ捨テヽントナリ。行幸云々。若シ主上他所へ行幸ニモナラバ、御免ヲ蒙リテ、ソノ御行列ノ中ニ少々矢ヲ放タバ、御輿丁ナドハ御輿ヲ捨置テ逃去ランソノ時、爲朝、カヤウ〳〵ニセバ、勝軍ハ掌ヲ返スガ如ケン。サレバ天ノ明ケザル中ニ事定マルベシトナリ。爲朝ノ意氣豪然ト

シテ、戰ヒヲ何トモ思ハサルサマ、サナガラ目ノ前ニ見ルガ如シ。射んする、放さんする、決せん條、ナドアルハ當時ノ詞ツカヒナリ。

(總評)此文爲朝ノ弓勢ノ事ヲカクヲ主トス。故ニ句コトニ弓矢ノ事アラザルハナシ。又初ニ爲朝ノ九州ニ生長シテ質直剛毅ナルサマヲ叙シ、終ニソノ言語ノ憚ル所ナキヲ叙シ。又其智謀勇略ヲ叙スルニ孰レモ樊噲、張良、養由、呉子、孫子等ヲ以テス。照應アリ次第アリト云フベシ。

(ニ)太田道灌の事　(常山紀談)

太田持資は、上杉の家老なり、鷹野に出でゝ、雨にあひ百姓の家に入りて、蓑をかし候へと、いはれしに、若き女、物は何ともいはずして、山吹の花、一枝折りて、出しければ、花をくれよといふことにてはなし、とて腹たちて皈られしに、これを聞きし人の、それは、七重八重花はさけども山吹のみの一つだになきぞかなしき。といへる古歌の心にて、蓑なしと申すことを、さいはで知らせ申したるなりと、いひければ、持資れぞろきて、われこれはぞの事をすら知らで、百姓の娘に劣ること、口惜しとて、それより書をよみ、歌に志をよせられたり、

太田持資、即チ道灌ノ本名ナリ。コノ人ハ始テ江戸城ヲ築キシ人ナリ。上杉の家老、上杉定正の家老職ニテアリシナリ。鷹野、鷹狩ニ野ニ行クコトヲイフ。コハ我國ニテハ、古クヨリ行ハレ來シモノナリ。舊幕ノ時マデモ、御鷹匠ト云フアリテコノ遊ビハ頗ル盛ナリシモノナリ。蓑。雨中ニ着ルモノナレバ借リニユカレシナリ。若キ女。即チカノ百姓ノ家ノ娘ナリ。ヨホド風流ナリシ女トオモハル。七重八重云々。山吹ノ花ハ七重モ八重モ咲クケレトモ實ノ一ツサヘモナイガ甚悲シキトナリ。みの一つだにト云フ語ニ重キヲオキテ味フベシ。さいはで。サウイハデニテ、即チ蓑ノナイト明カニハイハデ、歌ノ心ニヲ知ラセタルナリ。持資れぞろきて云々。コレヨリ持資大ニ恥ヂテ歌道ニ心ヲ寄セタリトナリ。

又ある時、下總國へ軍を出し、に、山涯の海邊に、山上より、石弓をはりたり。潮湛へた

らば、通ひかたかりなん、いかにといへるに、折節夜半なるに、持資いざ見て來んとて、馬を乘出しけるが、そのまゝ皈り、潮は干たりとて、軍を押し通されけり。これは遠くなり近くなるみの濱千鳥なくねに潮のみちひをぞしる。とよめる歌あり。それを思ひいでゝ、千鳥の聲、遠くきこえたれば、潮の干たるを知られたりとなり。持資いざ見て來ん。いざハサア、ドリヤ、ナド云フ意。見て來んハ見テ來ヤウト云フ意。干潮ノ沖ヘヒキ下リテ、海ヲ干シタルヤウニナレバ云フナリ。なるみ鳴見潟ノ事ナリ。ソレヲ近クナルト云フヨリカケテイヘルナリ。千鳥ハ潮ノサストコロニ集マリテ、鳴キサワグモノ故ニ、ソノ聲ニ從ヒテ潮ノ滿干ガ知ラルゝト云フ歌ノ意ナリ。濱千鳥。トハ濱ニ居ル故ニイフ。コレモ歌ノ効能ヲイヘルナリ。

又退き口に、利根川をわたす時、夜にて暗さはくらし、いづこか淺瀬なるべきと、口々にいひけるに

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあたなみは立て。とよめる歌あり。波

のあらきところをわたせと下知して、難なく淺瀬をわたしけり。されば昔より武將は必ず學問に心をよせ、歌の道をも、能く知られけり。

波す時。軍勢ヲ渡スナリ。いつこか淺瀬なるべき。ドコカ淺瀬デアラウカト口々ニイフナリ。そこひなき。そこひハ底ナリ。底ノナイ淵トハ深キトコロヲイフナリ。やはハ反語さわぐやは、深キ淵ハ、水ガ淀ミテ騒ギハセヌトナリ。あた波。キマリノナイ波ナリ。山川ノ淺瀨ガ波ノタツコトニテ、深キ淵ニハ立タヌモノゾトノ歌ナリ。こそ。トハ取立テ、淺キ瀨ガト力ヲコメテイフナリ。下知して。命令シテナリ。コノ三ツノ話ハ、イヅレモ武將ハ學問ナカラヂバ危キコト多シト云フニツイテノ記事ナリ。

(總評)太田持資ノ武將ニシテ文學ニモ暗ラカラヌ事ヲカヽンタメニ、カクサマ〳〵ノ事ヲ敘セルナリ。三ツノ話ヲアツメ各歌ヲ本ニオコシテスラ〳〵ト書キ下セル、初心ノ人ノヨキ摸範ナルベシ。

因ニ云、太田持資ハ、足利末世ノ一武將ナガラ、學問ニ志厚カリシ人ナリ。幼ヨリ鎌

倉ノ僧房ニ入リテ、文ヲ學ビ、神童トイハレシホドノ人ナリキ。後剃髪シテ道灌ト稱ス。寛正五年京師ニ朝シ、大將軍足利義政ニ謁ス時ニ後土御門天皇、詔シテ武藏野ノ狀ヲ問ハシム。道灌直ニ歌ヲモテ答ヘ奉ル。ソノ歌。

露おかぬ方もありけり夕立の
　そらよりひろき武藏野の原

又隅田川都鳥ノ事ヲ問ヒ玉ヘルニ

年ふれどわがまた知らぬ都鳥
　隅田川原に宿はあれども

又風景ヲ問ヒ玉ヘルニ、

わが庵は松原つゞき海ちかく
　富士のたかねを軒はにぞ見る

天皇叡感斜ナラズシテ、左ノ御製ヲ賜ハリタリ。

武藏野はかるかやのみとれもひしに
　かゝることばの花やさくらむ

戰爭攻伐ヲ事トスル、武將ノミ多カル世ニ、珍ラシキ一ナリ。道灌慕景集、平安紀行ナドノ著アリ。ソノ土木ニ委シク戰爭ニ長シタリシコトハ、人ノ能ク知ルコトナレバイハズ。

（ホ）結城秀康關東にとゞまる　（藩翰譜）

徳川殿、奥の景勝中納言、御誅伐の時に、上方の早馬來りて、大坂の兵起りぬと申す。御方の大名小名、小山の御陣に、集まりて、軍評定す。まづこの所より、ひき返し、上方に向はせたまふべきに評定す。

徳川殿、家康公ノ事ナリ。奥の景勝、上杉景勝ナリ。上方の早馬、上方トハ京都大坂ノ方ヲイフ。早馬トハ注進ノ爲ニ、馬ヲ早メテ來ル使ナリ。大坂の兵、石田三成等ガ兵ヲ起シテ、徳川氏ヲ倒サント企テシコトヲ云フ。御方の大名小名、家康公ニ附從ヒ

タル多クノ大名小名ナリ。小山の御陣トハ家康公ノ本陣ナリ。軍評定すトハ軍略ヲ議スルコト、當時ノ詞ナリ。まづ云々トモカクモ、一先ツ、此處ヨリ上杉攻メノ軍ヲヒキカヘシテ、上方ニ向フベキコトニ定マリヌトナリ。

コノ段ハ、大坂兵ノ起リシコトヨリ、ソノ注進ニヨリテ家康公ノ關東軍ヲ處置セラルヽコトヲ書キタルナリ。

徳川殿、本多佐渡守正信をめされ、家康西に向はん時、景勝やがて後を追ひて攻めのぼるか、さらずば、また、關東にや亂れ入らん、誰かこの所に殘りとゞまつて、軍をばすべきと仰せらる。正信誰とかさらに申すべき、守殿(カウトノ)に如(シ)くことやあるべきと申す。さらばめせとてめす。守殿御參りあるに、正信迎へまゐらせて、いかに殿(ン)、天下の安危は、今日に決し候ひぬ。よく心して物申させたまへとて、御後にしたがひて御前にまゐる。

正信をめされ、正信ヲ近ク呼ビヨセラレテナリ。家康西に向はん時云々、以下家康公

ノ詞ナリ。西トハ大坂征伐ノ爲ニ關西ニ向ハルレバナリ。景勝やがて云々、景勝ハ即ワガ後ヲ追ヒテ攻メ上ルカ、然ラズバマタ關東ニ亂入セン、誰カコヽニ殘リテカノ軍ヲバ防ギ止メンコトヲスルモノゾト問ハルヽナリ。誰とかさらに申すべき、誰トヽ殊更ニ申スベキコトカトナリ。守殿トハ、即結城秀康ニテ、家康公ノ養子ナリ。松平參河守ト云ヒシカバ、守殿ト通ジテ呼ビシモノト見ユ。如くおとやあるべき、如(シ)クコトアルベキヤニテ、コノ殿ニ若クモノハナシト云フナリ。さらばめせとてめす、然ラバ召セトイツテ、直ニ秀康ヲ召シヨセラレタルナリ。コノ文簡ニシテ盡セリ。いかに殿、正信、秀康ヲ待迎ヘテイヒカクル詞ナリ。勢ノ鋭キコト見ルカ如シ。天下の安危云々、コレ正信ガ第一ノ詞ナリ。よく心して物申させたまへ、コレ正信秀康ニ注意スル詞ナリ。心してトハ能ク心ニ思慮アリテトイフニ仝ジ。御後にしたがひて云々。

コノ所、ヨク心ヲトメテ正信ノ狀ヲ思ヒヤルベシ。

初メ正信家康公ニ向ヒテ推舉セシ秀康ノ事ナレバ、ソノ首尾ヲ完クセントカクマデ

苦心セシナリ。コノ文ヨク正信老練ノ狀ヲ寫シ出セリ。

徳川殿、東西の軍の事、御物語(オンモノガタリ)ありて後、おことは我が爲に、こゝに留まりて、關東を鎮めなば、我はまづ上方にむかひて戰はんとれもふはいかにと仰せければ、守(カウ)殿、御けしきあしうなりて、秀康いかでか、御後にのこり候べき、たゞいづくまでも、御先をこそかけ候ふべけれ、とのたまへば、上方の軍勢は、皆國々の集まり勢何十萬騎ありとて、何ほどのことかあるべき、そも〳〵上杉家は、累代坂東の大將にて、中にも、故輝虎入道の時に至りて、弓矢取て、天下に肩をならぶるものすくなかりき。されば、その子として、景勝また幼弱のむかしより、軍の中に成長し、年既にふけぬ、當時彼にむかひて、たやすく軍せんもの、多からず。天ッ晴、れことが爲には、よきかたき、海道にむかひ、打こみの軍せんよりは、れことひとり、こゝにとゞまつて、軍したらんには、且は弓矢取ての面目何ことの孝行か、これに過くべき。と仰せければ、

東西の軍の事、大坂勢ノモヤウ、上杉軍ノヤウスヲ談シセラルゝナリ。れこと、御事

ニテ目上ヨリ目下ニ向テイヒシ當時ノ詞。コゝニテハ、秀康ヲサシテイハルゝナリ。けしきあしう、氣色惡シウニテ、意外ナル父ノ詞ニ、ヤゝ不快ニ感ゼラレシサマナリ。いかでか、豈トイフ意ニ似タリ。ドウシテ拙者御後ニ殘リトゞマラン、タゞ何處マデモ御供セントイフナリ。御先をこそかけ候ふべけれ、軍ノ先驅セントイフコト。上方の軍勢云々、コレヨリ家康東西両軍ノ强弱ヲ詳ニ述ベラルゝナリ。弓矢取てハ、武ヲ以テトイフニ仝ジ。弓矢ハ武士ノ第一ノモノナリシ故ニ武士ノコトヲ弓矢トル身ナドイヒシナリ。年既にふけぬ、コノ詞ニテ景勝ガ軍事ニ長ケタルコトヲ知ラセタルナリ。味フベシ。海道にむかひ云々、東海道ニ向ッテ、石田ナドガ鳥合ノ兵ト戰ハンヨリ、コゝニ留リテ、景勝ト戰ハゞ汝ガヨキ敵ノミカ一ニハ弓矢取テノ面目、我ニ孝行ナル、コレニ過キタルコトハナシト諭サルゝナリ。

コノ段、父子ノ間ノ問答ニ、家康ノ慈愛ニシテ老練ナル、秀康ノ勇武ニシテ活潑ナルサマ、オノッカラ見エタリ。正信ハ、コノ問答中、イカニ心ヲ苦シメケン。

やゝあつて、守殿、軍は必す勢の多少によらぬと承る。上方の大將にも、名をえたる輩少からす。勢のほどもまたさてそ多からめ、秀康いまだ軍にはならはねども、景勝一人が勢と戰はんに、何ほどのことかあるべき、あはれ大將をだに御ゆるしあらんには、この所にや留り候はんと宣ひしかは、正信聞きもあへず、いしくも仰せ候ものかな、關東をしづめたまはんに、大將をまねらせたまはんこと、仰にや及ぶと申しければ、德川殿、世にうれしげにて、御涙を流され、みつから御鎧一領とり出して、そも〳〵この鎧は、家康が若かりしより、身につけて終に一度の不覺をねぬず、父か嘉例に准へて、今度奥州の大將して、よき軍し、天下に名を擧げたまふへしとて、まねらせらる。守殿も御こゝちよけに、御いとま申させたまひ、下野國、宇都宮に、陣取て、關東をしづめたまひしに、上方の軍破れて後、景勝も降を乞ひければ、伏見に參りたまひけり。おのたびの勸賞に、越前國をたまはりて、明る慶長六年五月、福井の城に移りたまひぬ。

やゝあつて、暫クアリテナリ。コノ句ニテ秀康ノ思慮セシ猶豫ヲ與フ。ならはねと

も、馴レザレトモトイフ意。あはれ云々、秀康ノ眞卒ナル見ルカ如シ。大將ニサヘシテ下サラバトイフ意。いしくも仰せ候ものかな、いトハ美ニテ、シ、シク、シキ、ト活ク詞、神妙ニト云フ意、當時ノ詞。仰せにや及ぶ、仰セ玉フホドモナシトナリ。世にうれしけ、嬉シサウナルサマナリ。世トハコノ世ニテトイフコトナレトモ、カヽル時ニハサホド深キ意ハナシ。御涙ハ感涙ナリ。秀康ノ勇武ナル志願ニ感セラレタルナルベシ、不覺をおはす、貪ケシコトナシトイフカ如シ。イツモ首尾ヨキ鎧ナリトナリ。大將して、大將デトイフ意。しハ例ノ如シ。參らせらる、鎧ヲ與ヘラレタルヲイフ。御心ちよけに、心チヨササウデ、御父子別レトナレルヲイフ。勸賞、褒美ト同シ義。越前國云々、コノ時越前ニ封セラレテ、七十五萬石ヲ領セラレシナリ。

(總評)家康秀康正信三人ノ體度ヲアラハシテ餘蘊ナシ。初ニ正信ガ、速ニ秀康ヲ推擧シタルヲ、家康モ心ヨク諾セラレタルコトヲ書キ、中ホド家康秀康ノ問答、ヤヽ六カシクナラントセシニ、家康ノヨク諭サレシコトヲ書キ、終ニ秀康大將ヲタマハラ

バ、留マラントイハレシニ、正信聞キトリテ天ツパレ神妙ニモ仰セラレケルヨトテ、未タ家康ノ返辭ナキニ、ソノ處ヲトリナシ、家康モ、ソノ殊勝ナルニ感シテ遂ニ鎧ヲ賜ヒテ別レラレタルニ書キトメタル終始三人ノサマヲカケルニモ、尤正信ノ苦心ノホトヲキカセタル老練ノ筆ツキトイフベシ。末ノ四五行ハ、コノ秀康ノ終ヲツケタルモノナカラ東西両軍トモ勝テルコト僅ノ文ニテコトワリタルナリ。

(續近世畸人傳)

(へ)加賀千代女の事

千代女は、加賀の松任の人にて、幼より風流の志ありて、俳諧をたしなむ、しかれども、その師を得ず。これかれ行脚の人に問ふに、美濃の盧元坊を稱すること皆同し。これによりて、殊更に行きて、學はんとおもへるに、折しも行脚して來りしかば、その旅宿に就て、相見をこひ、志をのぶ。元、くたぶれたりとて、寢てありしところへゆきて、敎を求むるに、さらば、一句せよといふ。初夏の頃なれば、郭公を題とす。やがて、句を吐きたるに、元、そのたゞものならざる氣韻をみて、その句をうけかはず。これは誰もすべ

きところなりといふ。さらばとて、又一句を吐く。猶うけがはざること初のごとし。元は既に眠りにつけども、女は猶さらず、沈吟す。その眼のさめたるを、うかゞひては、又一句をとふ。かくて、數句に及び、つひに曉天に至る時、元、をきて、終夜さらざりしや、夜は明けたりやとれとろく時に。千代女、

ほと、きすほと、きすとて明けにけり

といへるを、大賞し是なり〳〵、汝他日この意地を、わするゝことなくば、名天下にふるはん、と師弟の約をなせり。果して女流にめづらしき、この道の高名にいたれり。これはまた少女の時なりけらし。

風流の志、詩歌俳諧等ニ心ヲヨセテ、アマリ世事ニコセ〳〵セザル志ヲイフ。行脚、諸國遊歷ノコト。盧元坊を稱する云々、皆々元坊ガヨキト稱フナリ。志をのぶ、前ノ風流ノ志トイヘルニ應ズ。一句せよ、俳諧ヲナリ。たゞものならざる、素人デハナイト見テ取リタルナリ。うけかはず、承知セサルコト。女は猶さらず云々、千代ノ熱心

ナルコト知ルベシ。幼ヨリ風流ノ志アリトイフニ能ク適フ。ほゝとぎす云々、味ヘバ味フホド面白キ句ナリ。ア、杜鵑々々トイツテ終ニ夜ガ明ケタリトナリ。夏ノ夜ノ短キサマ、又杜鵑ヲ詠スルコトノ難キ意ヲモ含メリ。

後聟とりせし時、

澁ぶかろか知らねど柿の初ちぎり

まことに俳諧にてをかし。

俳諧にてトハ諧謔ニテトイフホドノコト。娘心ノアリサマ、ソノマヽト云フベシ。

世或ハコレヲ見テ、生意氣ナリトイフモノアルハ、反ツテイカヾナリ。

廿五歳にて、夫にわかれし時、

起きて見つ寢て見つ蚊屋のひろさかな

夫婦相別レシ情、實ニカクコソアリケメ。

生涯身を全うし、一人の男子に、夫の家を嗣がしめて後は、尼になりて、別居し、素園と

いふ。書も越後の吳俊明に學びて、頗る風韻あり。或人書を上に、讃を下に書きて、たまへと望みしに、あさがほのたれたるを長くかきて。

朝がほや地につくことをあぶながり

句のさま、すべて女流の趣ありて強からず。

地につくことをあぶながり、イカニモフラ〳〵ト、上ヨリ長ク下レル朝貌蔓ノサマ、思ヒヤラルヽナリ。

朝がほにつるべとられて貰ひ水

など人口に膾炙して賞す。

花ヲ愛スル優シキ心ヨリ、ツヒ水ヲ汲ムコトヲヤメテ、他家ヨリ水ヲ貰フトイフ。實ニ風流ノ極意ナルベシ。つるべとられてトハ釣瓶ニ朝貌ノマツハリテ花ノ咲キタルヲイフ。釣瓶ハモト我モノナルニ、今朝貌ニトラレタリトイヘル尤面白シ。

永平寺の長老、道のついでに、問ひたまひて、一念三千の意を句に作るべし、と求めたま

へるに。

千なりも蔓一すぢの心から

これも世に語りつといふ。老極まりて死せりとぞ。句集ありて世にひろまりぬ。

永平寺の長老長老トハ僧ノ頭ナリ。永平寺ハ越前ナリ。千なり千ナリ瓢トイフモノナリ。蔓一筋ノ心トイヘル所謂一念三千ノ意ナルベシ。心からハ心故ニニテノ意。

（總評）此文サホド名文トニハアラヂド、能クスラ〳〵ト、千代女ガ重ナル事ヲカキ此句ノ順ニヨリテ、ソガ一生ノ事ハ知ラルイトメデタシ。

（二）紀行文

（イ）水分神社　（菅笠日記）

藏王堂より、十八町といふに、子守の神ましまします、あの御社は、よろずの所よりも、心入れて靜に拜み奉る。さるは、むかし我父なりける人、子持たらぬ事を、深く歎きたまひて、遙々とこの神にしも、禱きことしたまひけるしるしありて、程もなく、母なりし人、

たゞならず、なりたまひしかば、かつ〳〵願ひかなひぬと、いみじう悅びて、同じくば、男子えさせたまへとなん、いよ〳〵深くねんじ奉り給ひける、われはさて生れつる身ぞかし。

菅笠日記ハ、本居宣長先生ノ明和九年三月ニ吉野ヘ行カレタル紀行ナリ。コヽニ引ルハ、ソノ三月八日ノ條ナリ。

藏王堂、聖武天皇ノ敕願寺ト云フ。今モ吉野ニアリ。子持たらぬ、子ヲ持テアラヌナリ。たゞならず平常ニアラヌニテ、懷妊セラレシコトヲイフ。かつ〳〵、マア〳〵ト云フ意。同じくば、ナロウ事ナラト云フ意。得させたまへ、男子ヲ得サセタマヘト祈ルナリ。我はさて、我宣長ハ、サウシテ生レ出タ身デヤトナリ。

十三になりなば、必ずみづから率てまうでゝ、かへりまうしはせさせんと、宣ひわたりつるものを、今すこし得堪へたまはで、わが十一といふになん、父失せたまひぬるを。母なんものゝついでごとには宣ひ出でゝ、涙れとしたまひし。

十三に云々コレヨリ両親カ自分ノ身ノ上ニツイテ語リ、且望ミシイナドヲ思ヒ出デテカ、レシナリ。率てまうで、云々必ス我ヲ率テ詣テ、御返禮セサセント宣ヒツ、年月ヲ過シツ、アリタノヲ、今少シデ、十三ニナラウトスル所ヲ、コラヘガ出來ズテ、丁度十一ノ時ニ父ハ失セ玉ウタコト、母ガ事ノ序ニイツモ〳〵仰セラレテ、涙オトサレタトナリ。

かくて、その歳にもなりしかば、父の願果たさせんとて、甲斐〳〵しう、出て立たせて、詣でさせたまひしを、今はその人さへなくなりたまひしかば、さながら夢のやうに、

思ひいづるそのかみかきにたむけして
　麻よりしげく散るなみだかな

袖もしぼりあへずなん。

その歳十三歳ニナラレシヲイフ。なりしかば、成ッタレバナリ。父の願云々父ノ願意ヲ我ニ果サセントテ、母君ノマメ〳〵シウ出立テ我ヲモツレテコノ社ヘ詣デラレシナリ。今はその人さへ云々今ハソノ母マデモナクナラレタレバ、タヾ夢ノヤウナル心ガスルトナリ、ソノ思ヒニ堪ヘズトテヨマレシ歌ナリ。夢のやうにト云フヨリヤガテ歌ノ思ひいづるヘカケテ心得ベシ、そのかみかきハ其神垣ナリ、ソノ世ノコトヲソノカミトイヘバ、相通ハシテイヘルガ妙ナリ。手むけ、手向ケトテ神サマノ前ニ麻ヲ散ラシ奉ル古禮アリ。ソノ業ヲシテナリ。麻より云々ソノ奉ル麻ヨリモ繁ク散ル我涙カマアトテ深ク歎カレタル歌ナリ。袖もしぼりあへず歌ノ涙ト云フヲウケテソノ涙ノ爲ニ袖ガヌレラシボリキラズトナリ。

かの度は、むげに稚くて、まだ何事も覺えぬほどなりしを、やう〳〵人となりて、物の心も辨へ知るにつけては、むかしの物語をきゝて、神の御恵のをろかならざりし事をおもへば、心にかけて、朝ごとには、こなたにむきて拜みつゝ、又ふりはへてもまうでまほしく、思ひわたりしことなれど、何くれとまぎれつゝ過ぎ來しに、三十年を經て、今年又四十三にて、かくまうでつるも、契り淺からず、年おろの本意叶ひつるこゝちして、ひと嬉

しきにも、落ち添ふ涙は一つなり。

かの度は云々、カノ母ニツレラレテ來シ時ハ、一向ニ稚クテ何事モ覺エサリキトナリ。人となりて、成長シテナリ。昔の物語我身ノ昔ノ話ナリ。こなた、コノ神ノ方ナリ。拜みつゝ拜ミツ拜ミツニテ拜ミナガラト云フガ如シ。ふりはへても、ワザ〳〵モナリ。何くれと何ヤカヤトナリ落ちそふ涙は一つなり。イカニモ悲シサノ程思ヒヤラレテ筆モシブルヤウナリ、

そも花の便りは、すこし心淺さやうなれど、異事のついでならんよりはさりとも神も、たぼしゆるして、うけひきたまふらんと、猶頼もしくこそ』

そも、夫レハ夫レトシテナリ。花の便りは云々、花見の便ニカヽル御禮詣スルハ心淺キヤウナレト、外ノ事ノツイデナランヨリハ、花ノ事ナレハ、サアリトテモ、神モ許シテ承ケ引キ玉フラントナリ。猶頼もし云々カヽレハ、矢張コノ神サマヲ頼シク思ヒ奉ルトナリ。こそノ下あれト云フ語ヲ省キアリ。花ハ神モ愛シ玉フモノナレハナリ。

かゝる深き由あれば、此神の御事は、ことによそならず覺ゑ奉りて、年ころ書を見るにも、萬に心をつけつゝ、尋ね奉りしに、吉野水分神社と申せしぞ、此御事ならんと、はやく思ひよりたりしを、續日本紀に、水分峯神ともあるは、まことにさいふべき所にやと、地のさまも見さだめまほしく年ころ心もとなくおもひしを、今來て見れば、げにこのわたりの山の峰にて、いつこよりも、高く見ゆる所なれば、疑ひもなく、さなりけりと思ひなりぬ。ふるき歌に、みくまり山とよめるも、この所なるを、その文字をみつわけと僻讀して、こととところの山にしも、さる名を負ふせたるは、例のいかにぞや。又みくまりをよこなまりて、中ころには、御子守の神と申し今はただに子守と申して、うみのこの榮ゑを祈る神となりたまへり。さて我父も、こゝには祈りたまひしなりけり。

此段ハコノ神ノカヤウニ深キ關係アルヨリシテ、年頃調ヘラレシ一ノ一端ヲカヽレシナリ。まあとにさいふへき所にや云々、水分峯神トアレハ、此御社ノ峯ニ立セ玉ヘルヨリノ名ニヤト年來其地ヲモ見定メタク、床シク思ヒタリシヲ、今來テ見レハ、イ

カニモ高キ地ニテ、久シキ疑ヒモ晴レキトナリ。さなりけり云々サウデアルワイト思ヒナツタトナリ。ふる歌コハ萬葉集ニ見エタル歌ナリ。みつわけ水分ト云フ字ニ拘リテカヽルツマラヌ訓ミヤウシ、サテ外ノ所ノ山ニサヤウナル名ヲツケタルモノニテ、イツモ〳〵附會ノ多キヿト咎メラレタルナリ。よこなまりて詞ヲナマリテイフナリ。訛音なり。御子守枕草子、古今六帖ナドニ見エタリ。うみのこの云々子孫ノ榮エヲ祈ル神トノミ成リタマヘリトナリ。さて云々カヤウナル事ヨリシテ、我父母モ此神ニ我アラン事ヲ祈リ玉ウタヿヂヤトナリ。遙ナル前文ニ照應ス。

(總評)此文水分神社ニ詣テラレシヨリ、懷舊ノ情ヲ述ヘラレタル、字々悲歎ナラサルハナシ。初ニ神社ニテ靜ニ思ヒメクラス由ヲイヒ、中段父ノ事、母ノ事我身ノ事ニ分チテ、ソノ思ヒノ切ナルヨシヲアラハシ末段コノ神ノ子守ノ神ト誤リ傳ヘラレタル事ヲ述ベ、サテ結句我ヲ祈ラレシモ、ソレニ依ルヨシヲイハレタル、順序アリ照應アリ。紀行文ハタヾ思ヒノマヽヲカキツヽクルモノナレトモ、大先生ノ文ニハ、オノツカラ其體備ハリテメデタキコトカクノコトシ。

(ロ)菊川　(中空の日記)

槇の原を過ぎて、下りはつれば、菊川なり。宿ニ西岸ニ而失レ命と書かれし承久のいにしへ、れなし流れに身をや沈めんとよまれたる元弘のむかし、かれといひ、これといひ、思ひやるだに、とり〳〵に悲しからずやは。こゝろある人、たれかは、袖をしぼらざらん。東路(アヅマヂ)にありとき、つる菊川は、

なみだ千代ふるところなりけり

中空の日記ハ、香川景樹翁ノ文政元年ノ冬、江戸ヨリ伊勢尾張ヘ行カレタル、紀行ナリ。コヽニ引ルハ、ソノ十一月十五日ノ條ニテ、東海道菊川ノ記ナリ。

下りはつれば、下リ終レバナリ。宿西岸云々ハ、承久ノ亂ノ時、中御門宗行卿ノ捕ハレテ關東ニ下ラルヽ時、コノ宿ニテ、カヽレシ有名ナル、昔南陽縣菊水、汲ニ下流ニ而延レ齡、今東海道菊河、宿ニ西岸ニ而終レ命トイヘル句ナリ。れなし流云々、元弘ノ亂ニ、

藤原俊基朝臣ノ此宿ニテ、承久ノ事ナト思ヒ出シテ、古もかゝるためしをさく川のれなど流れに身をや沈めんトヨマレシ歌ヲイフナリ。かれといひ云々、かれトハ承久ノ句、これトハ元弘ノ歌ナリ。思ひやるだに云々、今ヨリ思ヒ遣ルサヘ、イツレモ〳〵打ソロッテ悲シキコト、強メイヘルナリ。心あらん人云々、物心有ランホドノ人ハ。誰カ是等ノ事ヲ思ヒ出テ、涙ニ袖ヲシボラザルモノアランヤト悲シメルナリ。東路に云々、コノ悲シミノアマリニ、ヨメル歌ナリ。東路トハ東海道ヲイフ。東ヘ行ク道ト云フ。さゝつるさく川、聞イテ井タ菊川トツヾケテ、詞ノ文ヲナセルナリ。(菊ヲ聞ニ響カセテキカセタリ。)涙千代ふる云々、菊川トハ菊ノユカリニ、千代ノ齢ヲ經ルモノト思ヒシニ、今オモヘバ、悲シクテ涙ガ千代ヲ經ル所デアルワイト驚キタル意ニイヘルガイト悲シク、メデタキナリ。

やがて、佐夜の中山にかゝる。やう〳〵上りはてたる山のたわに、尾花しどろに打臥し、あるは枯れ立てるさま、いと悲しげなるに、別れつる愛松軒のあたり、そゞろに思ひ出つ。

心にはかれずや猶もまねくらん
目白のをかのしのゝをすゝき

佐夜の中山、菊川ヲ渡リテ直グナル地ナリ。コノ地名高キ地ナレバ、ワザ〳〵コトワレルナリ。紀行カクニハ、カヽル所ニ注意スベシ。山のたわ、たわトハ撓ミタルトコロヲイフ。尾花、即チ薄ノ事、コノ花、獸ノ尾ニ似タレバ、カクイフトゾ。しどろ、不揃ニ、不規則ニナリ。別れつる云々愛松軒トハ、翁ガ江戸ニテ假寓セラレシ小石川目白臺ノ邸ナリ。初メコヽヲ出立シケル時、ヨマレシ歌ニ、しばしとも人はとゞめぬ門出をば、尾花ばかりぞ打まねきける。トイフアリ。ソノ事思出でゝ、今コノ薄ノイト悲シゲナルヨリ一層感慨ヲオコサレシモノト思ハル。そゞろ覺ヘズ、何トナクナリ。心には云々、かれずやトハ離レズヤニテ目ニハ見ヘズ、今ハ離レタレド、心ニハ矢張我ニ離レズ我事ヲ思テ招クナラン、カノ我邸ナル目白臺ノ薄ハトナリ。心ニハトイ

ヘルヨリ目白トウケタルイトメデタシ。

(總評)コノ文コレト云フ思入ハナキヤウナレトモ、僅々タル中ニ舊事ヲ懷ヒ、故郷ヲ忍ブ情ヲサナガラ打出ラレタル紀行文トシテ必アルヘキ事ナリ。翁ノ最モ歌ヲヨクセラレタルコトハコノ二首ニテモオノヅカラ知ラル、ナルベシ。

(ハ)淺草、隅田川　(回國雜記)

淺草といへるところにとまりて、庭に殘れる草花を見て、

冬の色はまたあさくさのうら枯に
　あきの露をものこす庭かな

回國雜記は、文明十八年、聖護院ノ道興大僧正、諸國ヲ巡廻セラレシ紀ナリ。當代ノサマ思ヒヤラル、事多カレハ、コ、ニ引出デツ。コヲ宗祇ノ文トセルハ誤ナル由、早ク關岡野洲良ノ辨セシカ如シ。

淺草今ノ東京ノ淺草ナリ。またあさくさ、淺ト云フヨリヨミカケタリ。

この里のほとりに、石枕といへるふしぎなる石あり。その故を尋ねければ、中ころの事にやありけん、なまさぶらひ侍り、娘を一人持ち侍りき。容色大かたよの常なりけり。かの父母、娘を遊女にしたて、道行きかふ人に出むかひ、かの石のほとりにいざなひて、交會のふせいを事とし侍りたり。かねてより、相圖のことなれば、折をはからひて、かの父母、枕のほとりに立よりて、共寢(トモネ)したりける男の頭(カシラ)をうちくだきて、衣裝以下のものを取つて、一生をれくり侍りき。

石枕、コノ事ハ、江戸砂子ニモ見エテ、强チニ作リ事ニモアラザルベシ。厭フベキ話ナレトモ、今ノ世ノウレシキニ引キカヘテコノ頃ノ淺草ハカ、ル淋シキ所ナリシヲ思ハシメントテ、一ッニハ引出ス。砂子ニハ、日は暮れて野にはふすとも宿かるな、淺草寺の一つ屋の内トイフ歌モ見エ、コノ事ヲヨメルナラン。中頃、中昔ノ頃トイフニ仝シ。なまざぶらひ、なまハ生(ナマ)ニテ熟ニ對スル語。生兵法、生意氣、生學者ナトイフ如ク、ナマ〳〵ノ士ヲイフナリ。カ、ル者ナレハコソ、カヤウノ惡行ヲモナシツレ。

さるほどに、かの娘、つや〳〵思ひけるやう、あなあさましや、いくほどもなき世の中に、かゝるふしぎのわざをして、父母もろともに惡趣に墮して、永劫沈淪せんとの悲しさ、先悲にれきては、悔ゐても益なし、これより後の事さま〳〵工夫して、所詮われ父母を出しぬきてみんと思ひ、ある時、道ゆく人ありと告けて、男のごとくに出たちて、かの石にふしけり。いつものごとくに心えて、頭をうちくだきけり。いそぎ物ともとらんとて引きかつぎたる衣をあけて見れば、人一人なり。あやしくれもひて、よく〳〵見れは我娘なり。心もくれまどひて、あさましともいふばかりなし。それよりかの父母、速に發心してたび〳〵の惡業をも、慙愧懺悔して、今の娘の菩提をも、ふかく吊ひ侍りけると語りつたへけるよし、古老の人申しければ、

つみとがのつくる世もなき石枕

さこそはれもきれもひなるらめ。

さるほどに、サヤウニシテアル間ニナリ。つや〳〵、コレハ一切トイフ語ニテ、コ、

ニハ叶ハズ、ツラ〳〵ナドノ誤カ。いくほどもなき、一本いくばくトモアリ。百年トモ生キヌ世ノ中ニナド云フニ同ジ。惡趣、天台四教義集注ニ、惡趣、一ハ地獄道、二ハ餓鬼道、三ハ畜生道トアリ。永劫沈淪、永ク地獄ニ墮落セント云フ意、佛語ナリ。かつぎたる衣、被リタル衣ナリ。コレ男ノ眞似シテ來タレバナリ。心もくれまどひ、心モ眞闇ニ惑ヒラナリ。サモアリケン。發心、出家シテ佛徒トナル事ヲイフ。慙愧懺悔佛語ナリ。涅槃經ニ慚ハ自ラ罪ヲ作ラズ、愧ハ他ニ作ラシメズトアリ。懺悔ハ、天台四教義集註ニ、將來ノ善果ヲ修メテ、已往ノ惡因ヲ改ムト見エタリ。菩提トハ佛ノ方ニテハ、道ノ極ルモノヲイフ。コヽハタヾ娘ノ助カルヤウニ吊フコトヲイフ也。さこそはれもきれ石枕故ニ重キトカケタリ。

當所の寺號を淺草寺といへる。十一面觀音にて侍り。たぐひなき靈佛にてまし〳〵けるとなん。

淺草寺ハ推古天皇ノ時ニ、漁父ガ網ニテ得シ觀音ヲ祭レリトイフ。堂ノ建立ハ、大化

元年ニテ沙門勝海ガワザトヅ。

參詣の道すがら名所とも多かりける中に、待乳山(マツチ)といふところにて、

いかでわれたのめもれかぬ東路の
　まつちの山にけふは來ぬらん

しぐれてもつひにもみちぬまつち山
　落葉を時とこからしのふく

待乳山、イマノ金龍山聖天ヲ安置ス。たのめもおかぬ、頼ミテモオカヌトナリ。待乳ノ待トイフ詞ヨリオコレリ。落葉を時と、落葉ヲ時トシテノ意ナリ。

あさちか原といへるところにて、

人めさへかれてさひしき夕まくれ
　淺茅か原のしもをわけつゝ

あさちか原、橋場ノ後、總泉寺ノ前ノ原ナリ。

れもひ川にいたりてよめる。

うき旅の道にながるゝれもひ川
　なみだの袖や水のみなかみ

れもひ川今詳ナラズ。

かくて隅田川(スミダ)のほとりにいたりて、皆々歌よみて披講などして、いにしへの塚のすがたあはれさ、今のごとくにたぐへて、

古塚のかけゆく水のすみだ川
　きゝわたりてもぬるゝ袖かな

いにしへの塚、梅若塚ノ事ヲイフ。きゝわたりても、川ノ縁ニテわたりトイフ。

同行の中に、さゝ江を携へける人ありて、盃酌の興をもよほし侍りき。猶ゆき〳〵て、川上(カミ)にいたり侍りて、都鳥たづね見んとて、人々さそひけるほどに、まかりてよめる。

ことゝはん鳥だに見えよすみだ川

都こひしとれもふ夕べに
れもふ人なき身なれどもすみだ川
名もむつまじきみやことりかな

さゝえ小筒トカケルモノナリ。竹ニテ作ル。旅中ニ酒ヲ入レテ携帶ニ便ニセシモノナリ。都鳥、伊勢物語以來有名ノ事トナレリ。二首ノ歌モカノ業平ノ歌ヲ本トセルナリ。まかりて、本語ハ退クコトナレドモ、コノ頃ハ行クコトニナレリ。

やう〳〵歸るさになり侍れは、夕の月、ところからもしろくて、舟をさしとめて、

秋の水すみだ川原にさすらひて
舟こぎりても月を見るかな

さすらひ、流浪シラナド云フ義。

次の日、淺草を立て、新羽といへるところにむき侍るとて、道すがら名所とも、たつねける中に、忍の岡といへる所にて、松原のありける蔭にやすみて。

霜の〻ちあらはれにけり時雨をば
しのぶのをかの松もかひなし

新羽、都筑郡小机庄新羽村トアル所ニヤ。忍の岡、即チ今ノ上野公園ナリ。古今ノ變遷思ヒヤルニ堪ヘタリ。

(總評)コノ文ハ非常ナル名文ニハアラザレドモ、能ク分ルヤウニカ〻レタル初學ノ手本トナルベシ。又歌ヲアマタ入レラレタルモ一體なり。(古ヨリ紀行文ニハ、詩歌多カレドモ、コレハ殊ニ多シ。)侍るトイフ語ノ耳障リニナルマデアルハ、當時ノ語ナレバナリ。

(二)吉野の花見　(吉野巡)

猶行きて、吉野町のすこし下なる、上市の方より上りぬ。七曲坂の上なる、道のちまたの邊より見れば、日本が花と名づけしあたりの櫻花最も多く盛りに見ゆ。こゝに暫し休らひて、目をほしいまゝにす。異所(コト)にかゝる花あるまじければ、日本が花といふも名

にし負へり。

吉野めぐりは貝原益軒翁ノ紀行ナリ。翁ノ筆ハ質朴ニシテ文少ケレドモ、能ク分リテ後進ノ手本ニスルニ最モ適セリ。サレバ、コノ篇モ六カシキホドノ詞モナケレド、讀ミ行ク中ニ、靄然タル翁ノ風采見エテ、ソノ學問ノ深厚ナリシコトモ推測ラルヽモノナリ。

上市。吉野川ニ添ヒタル町ナリ。上流ノ方ヲ上市ト云フ。七曲坂。七マガリ坂ト訓ムベシ。所謂吉野山ニ上ル道ナリ。休らひ。休ミテト云フニ同ジ。目をほしいまゝにす。目ヲ自在ニシテ花ヲ見ルトナリ。名に負へり。日本一ノ花ナレバ、日本ガ花トイヘルモ名ニ負カズトナリ。

明日こそ、心しつかにまたよく見めとて。まづ町に入り、舊館人を尋ねて、又こそ來たりたれ、今宵はこゝに宿るべきよしを告げ、暫く休みて、宿を出てゝ、奥の院の方へ行く。人丸塚のあたりに、僧のありけると、暫くかたる。子守の社の邊まで、花は盛りにさけり。それより上方は、山高ければ、花なほ稀なり。云々。金性大明神より、坂を下り如意輪寺の方へ行けば、こゝにも花多し。それよりかへるさに、吉水院に入りて、暫く堂中を見る。屏風の繪なども、古めかしくて、かれこれ見どころ多し。それより家にかへれば、日既に入りぬ。云々。

人丸塚。柿本人丸ヲマツレル塚ナリ。眞ノ墓ニアラズ。如意輪寺。有名ナル正行公ノ履歴ノアル所ナリ。吉水院。暫クハ南朝ノ行在所トナリシ寺ナリ。今モ在リ。後醍醐、後村上天皇ノ御手馴レシモノ、寶物トナレルアマタアリ。吉野ニ行ク時ニハ、必ズ詣ッベシ。

廿日、きのふよりかねて今朝の曙の花を見んとおもひし故に、はやく吉野の旅舍を出で、彼の昨日期せし所に來りて、立留り日本が花を見る。この谷、かの峯、目の及ぶところをながめやりしに、花今をさかりにさきてその多きこと、幾千株といふことを知らず。そのけしきのれもしろき、言語のれよぶところにあらず、たとへをとるものなし。もし強

ていはゞ、雪のわけぼのになずらふべきか。それはひたしろなる銀世界にて、わいためなく、目すさまじきのみにこそ。

曙の花。花ハ曙ヲ最モ賞スルモノナレバナリ。サレバ古人モ、三吉野の、花の曙見せたらば、もろこし人も、こま人も、大和心になりぬべし。ナド謠ヘルモアリ。強ひて云はゞ云々。ソノ景色ノヨサハ何ト譬ヘムモノモナケレド、強ヒテイハウナラバ、雪ノ曙ニ准ヘムカ。但シソレハ一向ニ眞白ク銀世界ニテ、何モ差別ナカルベク(草モ木モ皆白ケレバナリ)見ル目モスゴク興モ少カルベシ。サテハコレモ譬ニナラズ、トノ意ヲ含メリ。こそ。例ノ如クあれヲ省キタル格ナリ。

われ唐土(モロコシ)の書を多く考へ見しに、かゝるうるはしき花多きところありとも見ねず。海内奇觀といふ書は、すべて中夏の佳境をしるせり。そのしるしゝ處奇景勝地ねびたゞし。されど、その内にも、かうやうのところはしるさず。大庾嶺の梅は、名のみ高くして、書に記せるありさま、おのよそほひには比ぶべからずと見ゆ。況やもろこしの外には、かやうの奇絶なる見所はあらじとぞおぼゆる。この世に生きて、かゝるところを見るは、まことに大なる幸なるかな。

コノ段ハ吉野ノ花ノ絶景ナルヲ深ク賞センタメニ、支那ニモカヽル所ハナシ、況テソノ他ノ國ニモアラザラン。タヾ我國ニノミアリテ、無類ノ花ヲ太平ノ世ニ見ルコトノウレシキヨシヲ述ベラレタルナリ、カヽル思想ヲ紀行文中ニカクハ和漢共ニアルコトナリ。

昔見し時は、この邊の花、既に散りはてゝ、あらしも白きと詠せんころなりき。奥の院にのこれる稀なる花のさかりを見しだに、目れぞろきしに、今此處の花、最も多く盛りなるを見ること、よき折ふし來たれりとぞおもふ。このさま見し時は、かさねて來たらんおとを期せずして、今また幸に命ながらへて、この時にあひぬること、かねてれもひの外なり。況や我が輩既に六十に及びぬれば、重來は必ず期せず。このたびこそ、まことにこの花に永くわかるゝなるべければ、名殘をしからざるにもあらず。久しくやす

らひて、去りがたし。例のつたなき詩などいひ出でんも、恥かしければ、やみぬ。云々、嵐も白き。花ノ風ニ散ラサレユクサマヲ嵐モ白キト云フナリ。コレハ新古今集春下に太上天皇の御製。三吉野の高根のさくら散りにけりあらしも白き春のあけぼのトイヘル歌アルニヨレルナリ。奥の院云々。先年來リシ時ノ事ヲ思ヒヤリテコノ行ノ都合ヨキコトヲイヘルナリ。このたびこそ云々。重ネ々々コノ行ノウレシキヨシヲイヒテ、サテ此度ハ最早年モ老イタレバ、コノウレシクメデタキ花ニ永ク別ルヽ時ナリトイフ。イカニソノ情切ナラザラムヤ。名殘をしからざるにもあらずト安々ニイハレタル實ハ無量ノ感慨ナリ。例のつたなき云々。拙ナキ詩ナド云ヒ出デンモ、コノ美ハシキ花ニ對シテ、恥カシケレバ、今ハイハズトナリ。

(總評)コノ文日本ガ花ノメデタキ盛リヲ見タルコトヲカケルガ主ナリ。ソノウレシキアマリニ、嘗テ來遊セシ時ノ事ヲイヒ、唐土ソノ他外國ニモ類ナシトイヒテ、益ゝソノヨキヲアラハシ、遂ニ再ビコノ花ヲ見ルベカラザル由ヲカコチテヲハレル、ゲニ花ヲ愛スルモノヽ本情ナルベシ。文章例ノ平易ニシテ、シカモ優美ナルコト恰モコノ山ノ花ノ如シ。

肥後ノ人高本順氏(寛政コロノ學者)ノ歌ニ、

もろこしも東風(コチ)ふくたびに匂ふらし
よしのゝ山の花のさかりは

トイヘルアリ。メデタケレバ、コヽニ附記シテ吟誦セシメムトス。

(ホ)江戸の花見　(一話一言)

今年丁卯(文化四年)餘寒強くして、三月に入りて俄に暖氣になりし故にや、例年の花候にたがひて、遲速ともに均し。されど雨風まれなるゆゑに花の盛もまた長し。

一話一言ハ太田南畝(蜀山人)ノ隨筆ナリ。南畝ハ舊幕府ノ臣、博覽ニシテ狂歌ヲ善クセリキ。文ハ俗語ヲ交ヘテ書ケルカ多カレドモ、マタ品格アリテ見苦シカラズ、ヨクワカリテ耳目ニ入リ安キハ模範トスルニ足レリ。

遲速ともに均し云々。花ニハ早ク咲クト遲ク咲クトアレドモ、氣候ノ都合ニテ均シク咲キ、然モ雨風ナケレバ盛ナガシトナリ。

彼岸櫻は、二月の末よりやゝ咲そめしが、三月朔日おろさかりにして、八日の夕の雨風にうつろいぬ。七日のころより俄に暖かになり、九日十日の天氣和暖なるによりて、一重も八重も一時にひらきて花見る心いそがはし。十日の晝、上野の山に入りて見れば、彼岸櫻は、やゝ散りて、吉祥閣の左の一もと、松原の櫻今をさかりなり。

うつろひぬ。散リ果テタルコト。一重も八重も。コレ時候ノ變ニテ遲速ナケレバナリ。

十一日の夕つかた、護國寺にゆきて見れば、堂の後の大なる櫻、今をさかりにして、茶屋の軒にそひし一もとは、やゝちり過ぎぬ。鼠坂より小日向臺町のかたをすぐ。垣こしに緋櫻の見ゆるを見て、たつね見れば、道榮寺といふ禪寺臨濟宗なり。門の内に二本、庭に四本ばかりさかりなり。中にも一本は書院の軒はにちかく、まことに古木といふべし。これまで所々の櫻をくまなく見めくりしが、まのあたり近き所にて、名をだにきかず見のこしつるにも都下の大なるをしるべし。この外大塚の墓多し。

護國寺。小石川護國寺ナリ。緋櫻。緋色シタルモノ普通ノ花ヨリハヤヽ小ナリ。くまなく、遺ル所ナクト云フコト。コノ寺ノ花今アリシヤ尋ヌベシ。都下の大なるをしるべし。大カタ近キヲ疎ニスル習ナレドモ、江戸ノ廣キコトイカニモヨク書キタリ。太田道灌ノ露れかぬ草もありけり夕立の空よりひろさむさしの、原トイヘルト合セ考フベシ、

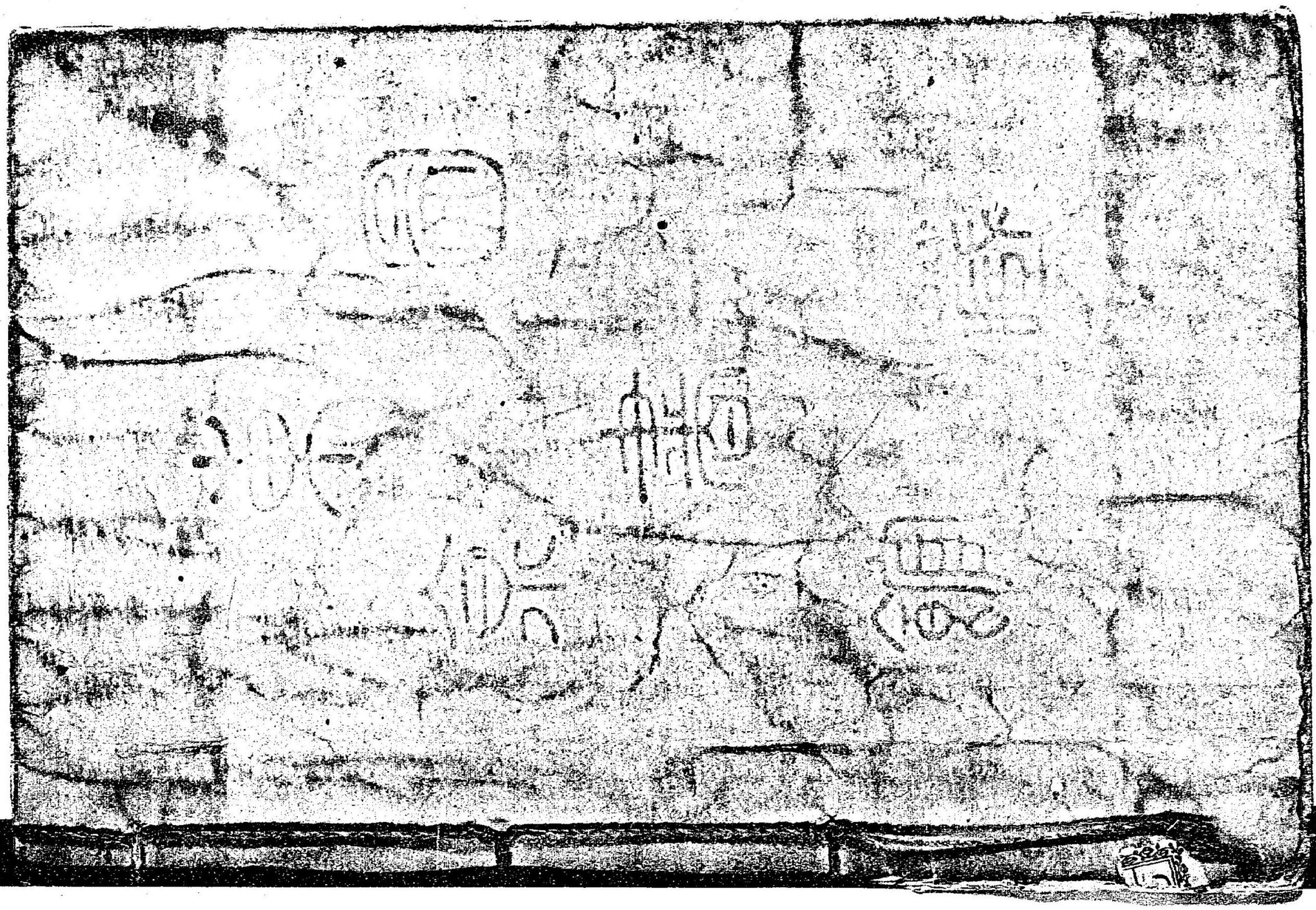
三月十三日、風つよし。小金井橋の花、大かたちりて殘りすくなしとその日見にゆきし大田垣氏の物語なり。十四日の朝の風雨にて、大かたちりぬ。殘れるも十六日夕雷雨に一重はちり、八重はうつらひぬ。

一重ハ云々。上文ヲウケテカケル面白シ。

62
105

(總評)コノ文日記ノヤウニ我見タリシコト聞キタリシコトヲスラ〳〵トカキツケタル中、大ニ味ヒアルハ、カノ時候ト雨風トヲ能ク取リ合セラレタルガ故ナリ。僅々タル數句ヨク當時江戸ノ花ノアリサマヲオモヒヤラシム。文ノ簡潔ニシテ誰人モ分ラヌモノハナキヤウニカケル、凡手ニテハ能ハザルコトナリ

國文摘解第一學級終



204668-000-1

62-105

国文摘解

小中村　義象／述

〔刊年不明〕

EDT-0042

大日本中學會
史料假借系譜
國八文
小中村兼象講
62
105